

「感謝」(1テモテ1章12-17節)

1 迫害者から伝道者へ

テモテへの手紙は一と二、二つとも使徒パウロの手紙です。手紙はパウロの人生の歩みから切り離すことはできません。キリスト教の迫害者からキリスト教の伝道者になったという彼の人生から切り離すことはできないのです。迫害者から伝道者になった。ふつうの人がキリスト者になる、一人のキリスト者が伝道者になる、それも神の力なしに起こらないことで、すごいことですが、それ以上に、パウロの場合、人生の向きがまったく反対になってしまった、生き方の大転換、価値観の大転換が起こった(フィリピ3章8節)。このことは周りの人間がよく知っていただけではありません。彼自身がそのことにこだわり、そこで起こったことは何であったのか、そのことを生涯にわたって考えつづけた人です。当時の教会の中には、彼が過去にそうした迫害者であったことで疑念をもちつづけた人もあったようですが、それはパウロも知っていて、自分のこの回心、悔改め、転換が、本当のことであったことを、生涯をかけ、その生き方によって証ししようとしたというようにも見えます。じっさい彼は皇帝ネロの迫害の中で殉教したと伝えられています。今日の箇所もそうしたパウロの回心の出来事を考えることなしには理解できないところではあります。

彼が歴史にはじめて登場するのは使徒言行録4章です。キリスト教の最初の殉教者ステパノの殺害に関連して出てきます。彼はまだ若者で、石を投げつけることはしていませんが、石を投げてステパノを殺した人たちの着物の番をしていました。殺害には賛成していたと書いてあります。その後彼はキリスト教の本格的な迫害者として現れ、男女問わずとらえて死に至らしめることもありました。今日の箇所にこう書いてあります。「以前、わたしは神を冒瀆する者、迫害する者、暴力をふるう者でした」(13節)。その彼が回心したのです。

回心の出来事を、同じく使徒言行録が伝えていきます。三カ所に、それぞれ状況が違います。描かれています。使徒言行録を書いたルカは、文才に恵まれた医者で、パウロの弟子でもありました。ですから、使徒言行録にあるのは、ルカのつくり話ではなくパウロ自身が伝えたことに基づくものです。

使徒言行録6章によれば、彼はその日、キリスト教徒を見つけしだい捕らえエルサレムに連行しようとダマスコに急いでいました。町の近くまで来たとき、突然天から強い光が射してパウロは地に倒れます。そしてこう言う声を聞いたというのです、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」「サウルとはパウロのことです」。それに彼はこう答えます、「主よ、あなたはどなたですか」。するとまたこういう答えがありました、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ。そうすればあなたのなすべきことが知らされる」。パウロに同行していた人たちも地

に倒れ、光は見たものの、その言葉の中身までは分からなかったようです。やがて起き上がった彼は、目を開けても何も見えず、同行人から手を引かれダマスコに連れて行かれます。彼はそこでアナニアという人に会い、信仰に導かれて、洗礼を受け、元氣を取り戻すのです。

地面に倒れたパウロに対するイエスの言葉の中に、「あなたのなすべきことが知らされる」(9章)とありましたが、他の箇所(26章)には、もっと具体的に、パウロの使命と関連して、異邦人に救いを伝える「奉仕者」とする、「証人」とするという言葉があります。この出来事を境にパウロはまったく別人のようになって、伝道者・宣教者として活動をはじめたのです。

2 感謝

キリスト教の迫害者から伝道者へ、回心によってこうした転換を遂げたのは、パウロが三十歳ぐらいのときでした。以来、三十年以上、若き日に示された福音の「奉仕者」「証人」というその使命にしたがい彼は働いてきました。テモテへの手紙、その第二の手紙は自分の殉教に言及するなどパウロの最晩年の手紙です。第一のほうはそれより少し早いようです。しかし晩年の手紙であることには違いありません。テモテを後継者とし、自分のあとをみすえて、信仰の戦いをりっぱに戦い抜くよう励ましているからです(9章12節)。とすれば、今日の聖書箇所のはじめの一節の言葉は、伝道者としての過ぎし歩みを、彼がふり返つて記している言葉と、受け取ってよいと思います。

わたしたちの主キリスト・イエスに感謝しています。この方が、わたしを忠実な者と見なして務めに就かせてくださったからです(12節)。

この言葉を、いま申し上げたように、パウロが自分の人生をふり返り記している言葉だとするなら、彼は、彼の踏み通ってきた自らの人生を、いずれにしても感謝の一言でふり返っているということです。キリスト・イエスに感謝、神に感謝、この言葉しかないということです。感謝の言葉で自分の来し方をふり返ることができるなら私どもにとってこれほど幸いなことはありません。

ここで用いられている「感謝」という言葉は、もともと「恵み」という意味をもつ言葉です。14節に「主の恵み」という言葉が出てきますが、それと同じです。感謝する、それはあふれるばかりの恵みを受けたということです。恵みを思い返し感謝しているのです。

ところで感謝というのは、ふつう、私どもが、思いもかけず、過分の好意を受けたときに生じる思いです。当然だと思ふときには、感謝は生まれません。足りないと思ふ

とむしろ怒りが私どもには生じます。

ということは、私どもが自分をどの程度に評価しているか、どのように思っているかと関係があるということです。その自己評価に見合うものを、他人から、それが神であれ、ただけないなら、何をしてもらっても満足することはない、つまりありがたいという気持ちは出てこないということです。自分はそれ以上のものに値すると考えているということです。反対に自分はとてもそんなことをしていただくに値しない、それほどに罪深い、パウロがここで言っているように、自分こそ最大の罪人だと思っ
ているならば(15節)、何をしていただいても、どんなことでも、それは分に過ぎること、ありがたいということになるのではないのでしょうか。感謝のころは謙遜のころと一対になっています。感謝のころは高慢のころと反対です。感謝のころは、どんなことをも、自分に不都合なことでも、受け入れるころ、つまり神への信仰のころと一つです。

今日の箇所を丁寧に読むと、キリスト・イエスが「罪人の中で最たる者」である自分を救ってくださっただけではない、そういう自分を見込んで、「務め」を与えてくださり用いてくださったことをふり返り感謝の言葉を口に行っていることが分かります。パウロにおいて、「憐れみを受ける」(13, 16節)ということは、務めに任じられることであり、遣わされることであり、奉仕することであり、証人となること以外のことではありませんでした。

わたしが憐れみを受けたのは、キリスト・イエスがまずそのわたしに限りない忍耐をお示しになり、わたしがこの方を信じて永遠の命を得ようとしている人々の手本となるためでした(16節)。

「恵み」はまたそのまま「召命」とならなければならなかった。何のために「憐れみを受けた」のかということです。私どももそれを問うべきです。パウロは、「人々の手本となるため」と書いています。別の言葉でいえば世界に救いを伝える奉仕者、証人として働くためということです。感謝と申しました。感謝のころは、感謝のゆえに、そこから押し出されて奉仕するころです。パウロは召されたのです。自らの務め、自らの生きる道を与えられたことを感謝しているのです。パウロにおいて感謝は、応答の行為を生み出し、奉仕となります。

3 くすしきみ恵み

このあと私どもは讚美歌451番「くすしきみ恵み」(アメイジング・グレイス)を歌います。この曲の作詞をしたジョン・ニュートンも、パウロと同じく、憐れみを受けて新たな使命に生きた人物の一人でした。この機会に、この作詞家について少し話

したいと思いません。

このもつとも有名な讃美歌の一つアメイジング・グレイス、直訳すれば、驚くべき恵み、つまりくすしきみ恵みとなりますが、これを作詞したのは、18世紀のイギリス国教会の牧師ジョン・ニュートン(1725-1807)です。彼は船員の父と熱心なクリスチャンであった母との間に1725年にロンドンに生まれます。海軍の兵士になるのですが、やがて奴隷貿易船の船員として奴隷貿易に従事するようになります。奴隷貿易というのは、西インド諸島の農園で砂糖や綿花を生産させるために、西アフリカから黒人を奴隷として買い付けていたことを指します。船底に鎖でつながれた黒人たちは過酷な条件で大西洋を運ばれていったのです。約300年(16-18世紀)のあいだに一千万人以上のアフリカ人が奴隷として中南米に運ばれたと言われています。この奴隷貿易に従事していたニュートンは、22歳の時、船が難破し奇跡的に助かったことを機に回心し信仰に近づきます。30歳で奴隷船の船長をやめて、聖職者をめざし勉強をはじめます。ようやく38歳のとき牧師となり、よい働きをしつつ、そのあいだにたくさんの讃美歌をつくることとなります。その一つがこの、くすしきみ恵み、アメイジング・グレイスです。

彼はロンドン市内の牧師になり、当時キリスト教会の中で起こりつつあった奴隷貿易反対運動に参加し、その重要なメンバーとして活動します。奴隷貿易反対運動の中心となっていたキリスト者の政治家はウィルバーフォース(1759-1833)とこう人です。日本ではあまり知られていませんが、欧米では知らない人はいくらも著名なクリスチャン政治家です。ジョン・ニュートンは、まだ若かった、小さい頃から知っていたフィルバーフォースの相談相手としてアドバイスを送っています。そのかいあって1807年に奴隷貿易廃止法案は議会を通過し、1830年代になって奴隷売買は廃止されることとなります。私はちょうど2007年の記念の年にウィルバーフォースの生家(記念館)のある北海に面した港町ハルを訪ねる機会があり、その足跡を少したどったことがあります。アメイジング・グレイスは、たんに神のくすしき救いの恵みをたたえ感謝する歌であるだけではない、奴隷貿易廃止運動と結びつきたいへん記念すべき歌なのです。

さて感謝ということまで話してきました。礼拝の招詞ですでに私どもは「感謝の歌をうたって主の門に進み・・・感謝をささげ、御名をたたえよ」という招きの詞を聞きました。そして礼拝の終わりでは「どんなことにも感謝しなさい」という勧めと共に世に遣わされます。神への感謝、キリストへの感謝、そして私どもと共にある人々への感謝を忘れず、今日からの一週間を歩んでまいりましょう。

(2018年6月17日)